

## 『CD『Happy Birthday』は私のことばです』

～捨てたものじゃない、縁が紡ぐ人生賛歌～ 井坂 和広 会員

## Happy Birthday

～この世界は築かれて、わたしがいる～

11の私がゆきだす  
やさしき詩 (19分)井坂 和広  
11歳ギター

『今年4月にCD『Happy Birthday』を制作して福祉施設への寄付金を募っています。1枚2000円で配布して代金全額を児童養護施設に寄付する事業を立ち上げました。CDショップ等の商業ルートに乗せず、演奏活動やネット、マスメディア等を通じた広報活動によって行うチャリティ事業で、営利性は全くないので消費税は乗せません。この寄稿を執筆した時点で、165枚、33万円に達しました。80万円貯まったら県内8施設に寄付する予定です。

最初のプレスは500枚(100万円分)ですが、次のプレス分から障害者施設等に広げていく予定です。このCD制作の初期投資額100万円は決して安くありませんが、再プレス以降は、8万円程度で500枚のCDを作ることができます。要するに、8万円の費用で100万円を半永久的に生み出すマシンを創造したことになります。このマシンを生かすも殺すも一般の皆さん次第です。因みに、当会では一人だけ新聞記事(朝日及び上毛)を見てすぐ事務所に来てCDを求めてくれた先輩会員がいますが後は全く音沙汰がありません。この寄稿によって会員から購入申し込みが殺到することを期待しています』、以上、告知です。

さて、ここから、Sなる人物の極小版自伝小説です(彼の旧姓の頭文字です)。Sは、昭和31年に神戸市長田区の下町で生を受けます。何せ、終戦後わずか10年です。近所の知人宅は6畳一間のアパートで6人家族が暮らしていましたから、我が家はまだまだしな方です。長屋スタイルの借家の壁(ベニヤ板)の節穴から外が覗けました。近所に焼け落ちたビルの瓦礫が残り、小学校の入学式で真っ黒なペンキで塗られた屋上を見て「なんで黒く塗ってるんや」とSが聞き、親が「B29の空襲を

避けるためや」と答えたことを記憶しています。貧しくも兄弟3人と父母と家族5人での下町暮らしは「三丁目の夕日」の風景そのまま、Sの人生でもっとも幸せな日々でした。母は専業主婦、父は長田区にある三菱電機の工場に勤める工員で夜は新開地のキャバレーで淡谷のり子のバックバンド(全員和服姿)のバンドマン(バイオリン弾き)。なぜか三男坊だけが父親の音楽の才能を引き継ぎ、幼少時から音楽に強い志向性を示します。バンドマンが大嫌いで教師や銀行員が大好きな母親も、4歳の三男を山の手御影町にあるヤマハ音楽教室に通わせてくれました(不思議ですが、父母で話し合いがあったのかも知れません)。母と共に春の日差しの中、道ばたの花々を見ながら歩いた御影の坂道はSの原風景です。この原風景を写真撮影のために向かうタクシーで思いがけず見て目頭を熱くしたことは当然です。オルガンの次にピアノが予定された教室のコースに乗っており、彼自身もこのままピアノを習えるものと思い込んでいました。幼稚園児のSは、既に将来は音楽家になりたいという夢をしっかりと持っていました。神戸国際会館のステージ経験は今でも彼の原体験になっています。ところが、急転直下、母親の姉(とても裕福)から「姫路の旅館(ビジネス系)を買うた、あんたやらへんか」という話が来て、家族全員で引っ越して母の「細腕繁盛記」が始まります。こうして慎ましい家庭はやがて「プチブルジョア」へと変貌していきます。

水を得た魚のごとく商才を発揮する母親の元で我が家は徐々に経済的繁栄の道を歩み、それと引き換えのように、三男坊に残されていた「芸術の灯」は消えてしまいます。Sの音楽の道は父親ごと家の隅に追いやられていったのでした。小学校2年で姫路に転校(貧乏でも何でもいいから神戸にずっといたかった、Sの人生はここから狂ったのね)、通学路で漏れ聴くピアノ教室の音に堪えきれず「ピアノを買って」とせがむ息子に母は「もっとお金持ちになるまで待って」と言い、優しいS少年は「ホンマかいな」と疑いつつ諦めますが、中学生になるとさすがにきっちり「騙された」ことに気づきます。

山陽地方は火力発電所やコンビナート、製鉄所の新設で高度成長期真っ只中。叔母所有の旅館の買い取りからビルへの立て替えへと母はやり手女将に変身していきま

す。S少年は、母親の強い上昇志向とS自身の中央志向を一致させて東京の大学に進学しますが、何せ目標がないからクラシックギターのサークルに入って全く勉強もしないで酒と麻雀の日々を過ごし気がついたら周囲が有名企業に内定を決めていく中、一人取り残されます(アリとキリギリスですね)。その頃、Sは若きギタリスト辻幹雄と出会います。幼少時からの夢の実現と閉塞状況の現実からの逃避が同時にできますから、Sに不安はあれど迷いはありません。辻とSは酒を酌み交わしながら、「辻さん、僕は音楽家になれると思いますか」「なれると思うよ」「では、弟子入りますので宜しくお願いします」と、コントのような会話でSは翌日から音楽家を目指します。Sは20歳、辻は27歳でしたからお互い「若気の至り」の感は拭えません。早稲田の政経に入った以上、当然有名企業に入ってくれると思い込んでいる母に「ギタリストになる」と宣言し、「アホちゃうか」と言われ、勘当同然で家族とほぼ絶縁状態になりますが当然です。明らかな裏切り行為で母に与えた落胆の大きさは計り知れません(兄たちも「あんなアホはほっといたらええ」と言ったに違いない)。こうして洞窟に籠もる修行僧のような7年間を送った果てに医者から「このままギター続けたら間違いなく腱鞘炎になる」と言われて心身共に限界が来た頃、最後のコンサートを終えてSは引き際を知ります。師に「ギターをやめます」と告げ、彼の無分別で無鉄砲な挑戦は当然のように苦い挫折で終わりを告げます。しかし、この音楽修業時代に後日プロを名乗る下地ができたことは間違いありません。この頃知り合った芸大出の絵描き(のタマゴ)と結婚、渋川の実家に婿入り(これが群馬と現職への縁の始まりです)、リンゴ農家・養蜂の手伝い・青果野菜の行商と慣れない仕事に打ち込むSの友達は「リカちゃん」という真っ黒の雑種犬だけという摩訶不思議なSの第2の人生の幕が開けますが、こんな生活が続くはずはなく30歳になって司法浪人となり37歳で合格します(はい、やっと当会と繋がりました、Sは寄稿者自身です)。こうしてSはそれと知らず自ら飛び込んだ「迷宮」からの脱出を見事遂げます。文字通り我が家の隅っこで世捨て人のように生きた父はSの迷宮生活が始まった矢先亡くなり、母もまた長年の苦勞がたたなりSの司法(裁判)修習のさなかに亡くなります。期待を裏切ったはずなのに結局、母親が望んで余りある職業につくという皮肉な結果になりました。

音楽家の夢を断念して約10年後、弁護士業の傍らでコンサート活動をするようになり「セミプロ」と呼ばれ

るようになります。そして、10年前にFM放送に出演した際の生演奏をCD化してチャリティ活動を始めますが、普通のギターで7分間の演奏のインパクト不足はいかんともし難く1年かけて10万円集めて(100枚分)児童養護施設「鐘の鳴る丘」に寄付して終わりを告げました。この時、自ら悟り半端な音楽活動に見切りをつけるSでしたが、配布した中の1枚が大切な縁を結んでくれます。チャリティCDがある人を通じてかつての師・辻幹雄の手に渡ったのです(辻幹雄は、11弦ギター奏者・作曲家としてカーネギーホールで世界デビューして11弦ギターの第一人者として名を知られるようになっていました)。かつての師から思いがけない電話がかかり40年ぶりの再会を果たしたとき、彼はかつての愛弟子の演奏を聴いて感動し涙が出たと言いました。こうして辻幹雄との交流が始まり、11弦ギターとオリジナル曲を伝授されてコンサートを催すようになります。

そして、昨年の夏頃、レコーディングをする決意をして、昨年11月から今年の1月にかけて丸3日間のレコーディングを終えて、今年の4月にCD「Happy Birthday」が完成しました。3日を要したレコーディングは、合格時の司法試験に比肩するほど、いやそれ以上の貴重な経験と成果を私にもたらしました。録音場所は東京目黒のスタジオで、エンジニア(助手含めて3名)のいずれも有名ミュージシャンの録音を手がけるスタッフの元、辻幹雄の監修で録音が始まりました。一流のプロが揃う中で無名のアマチュアである私のプレッシャーは半端なく緊張に押しつぶされるように最初の1曲目から躓きます。初日の夕方、未だに1曲すらOKが出ないまま、「取りあえず飯食おうか」と辻さんの声で近所の中華屋で私一人重い空気を引きずって食事を終えて録音再開。出口が見えないトンネルを進むごとく悪循環の真っ只中で一人あがいている私に、エンジニアK氏が「いつもの練習のつもりで弾いたらどうかな。適当に録音してるから勝手に弾いてよ」と言われて弾いているうちに自然体で演奏できる瞬間がついに訪れます。ガラス張りのブースからスタッフが見守る中、『賽の河原』よろしく、孤独と絶望感と戦いながら極限まで追い詰められた時、ふと自分が神聖で静謐な時間と空間にいることに気づきます。それは仏教の「業」に近い境地でした。そのときのスタジオは聖なる空間です。娑婆とは隔絶した世界での音楽体験を経てCDは完成しました。スタジオ、エンジニア、監修者の名が付された音楽CDは、その名に値する内実を備えない限り世に出すことは許されません。私が司法試験を超える達成感を覚えたのは当然

です。音楽家になることは法律家になることより遙かに難しいのです。

私は音楽のCDは、生演奏以上に、それ自体がある種の「力」を持っていないと人の心に届かず真の商品として成立しないことを身をもって知りました。このCDには、私個人の能力を超えた或る「力」が宿っているようです。私自身がこれを聴いて怒りを静めたり癒やしを受けることが多いのです。ギター製作者・ゲオルグ・ボーリンと作曲者・辻幹雄の力によって奇跡が起きたようです。45年前の師匠の言葉のとおりになりました。私が夢見た音楽家の姿をCDのジャケット(偶然にも故郷、御影公会堂と長田港が背景です)に見ることが出来ます。関係者全員のOKが出てレコーディングが完了した際、辻さんは、録音を聴いて「危なっかしいところはあるけど結局は音楽として辻褃が合ってるから不思議だ、でも考えてみたら人生も同じようなものだ」、そして、「このCDは、音楽界だけでなく社会に対する問題提起になる」と言いました。真意は語られませんでした。音楽に対する向き合い方が一般の音楽家とは根本的に違っていて、それが社会的視点と結びついていることを言うのかな、と私は解釈しています。

以上が弁護士である私がプロギタリスト・デビューしたというお話の起承転結です。音楽家崩れの父と経済実利主義者の母という水と油の家庭に育ち両方の因子を強く持つSが紆余曲折の人生を辿るのは必然でしたが、最終的に相容れない二つを統合する結果となりました。その意味で今回のデビューは父母に対するレクイエムでもあります。CD「Happy Birthday」は、一貫して寄付金の集積を目的とする営利性なき経済活動ですから、プロフェッショナル・ギタリストとしての活動です。この話は幼少時からのSの夢が還暦を過ぎて図らずも叶うという希望あふれるサクセスストーリーでもあります。[チャリティーギタリスト]、或いは、「ロイヤーギタリスト」というジャンルは日本では私が創始者だと思えます。実は、「ロイヤー」「ギタリスト」「チャリティー」の3つは三位一体をなし、どれか一つ欠けても「音楽家井坂和広」は成立しません。アルベルト・シュバイツァーは、マハトマ・ガンジーと並ぶ偉大なヒューマニストであり、アフリカで僻地医療に人生を捧げた医学者であると共に、バッハの研究者としても名を知られたオルガニストです。最近、彼について調べたら、彼は少年時に目覚めたある種の正義感に従って終生一環して行動した人物であり、哲学・神学の世界でも有数の学者であった彼は、30才の時に医者を目指して医師資格を取得、ア

フリカに渡って診療所を開設したことは周知のとおりですが、オルガニストでもある彼がヨーロッパ各地で演奏活動しながら診療所の資金を集めた話は胸に迫ります。シュバイツァーにとって、神学・哲学・医学・音楽は全て根っこで繋がっていてその根っこには彼特有の正義感があります。彼は、いずれの分野でも希有な才能を発揮しますが、オルガニストとしても名を知られる彼も演奏技術だけは若干難があったという評価もあり、その点でも私は親近感を覚えます。私も、弁護士活動と音楽活動は根っこで繋がっていてその根っこにはやはり私なりの正義感があります。DV、いじめ自殺、虐待死、医療過誤など、社会的弱者が被害者となる事件は、いずれも社会の隙間で陽が当たらぬ場所で起き、この隙間は、法や法手続の隙間でもあり法的救済が及ばないことになりがちです。この隙間ゆえの暗闇に陽を当てるのが法的救済の道を開くことに繋がります。私のチャリティ事業の目的は、児童養護施設等、陽が当たらぬ場所に陽を当てるきっかけを作ることです。

私は、この寄稿をきっかけに改めて自分の人生を振り返りました。4～5歳の頃からの夢をずっと温め続け、親の無理解に失望しながらも何とかやり過<sup>し</sup>て柵から離れた時、辻幹雄という若い音楽家に出会って夢に向かうが挫折して諦め、法律家になって新たな人生を送るが、偶然に世界的音楽家になった辻幹雄と再会して、40年前の二人の「約束」が果たされます。多くの人が時空を超えて縁を繋いで一本の糸を紡いでくれました。

最後に、CDの中のパンフレットにあるメッセージを引用して寄稿を終えることとします。本寄稿を読んだ会員の皆様からの購入申し込みを心からお待ちしております。『思いやり、正義、この二つの言葉がなんと薄くべからく、軽くひびくことでしょう。そのやりきれない思いはとても言葉にはできません。だからこそ音楽もあるのかも知れません。辻さんが11弦ギターで紡ぎ出したオリジナル曲はどこまでも深く、時空を超えて私たちに何かを語りかけます。古典的なたたずまいの中にどこか愛らしさがただよう。11の弦を持つ楽器はいま私に友のように寄り添っています。弾く人の心に限りなく近づくと、この楽器は真の姿を見せてくれます。春のゆくへ、この優しさに満ちた調べの名は、音と共に一つの詩をつくります。楽器、楽曲、演奏が一体となり、一つの世界をえがきだす。それは奇跡のような出来事だと思います。CD「Happy Birthday」は私のことばです。やさしき詩<sup>うた</sup>が皆様のお心に届きますように』